



## 親鸞の生涯 44

### 死と往生と願い

「何事も、去年・今年、老若男女多くの人々、死にあいて候うらんこそ哀れに候らえ。」

(親鸞八十八歳の手紙)

親鸞往生に先立つ（正元元年1260年代）は、全国まさに「地獄絵」のような時代でありました。

特に庶民たちは日々飢餓・疫病に晒され京都市王生では少女が屍を食べたと記録されています。

「天変・地天・飢餓・疫病あまねく天下に満ちて広く地上にはびこる。牛馬巷にたおれ、骸骨路に充てり」（日蓮『立正安國論』）

幕府や朝廷・寺社の行う呪法・祈願・祈祷などとても及びもつかない惨状であります。この現実に対して親鸞はどう向きあつたのでしょうか。

先ず親鸞の胸中には、消すことのできない痛切な懺悔がありました。

それは丁度越後から関東へ越す旅の途次。そのころも全国飢餓で路傍に死骸がたくさん捨てられていました。群馬県の佐貫（さぬき）という地で、その惨状に対し「衆生利益のため」「浄土三部經」の干部読誦を発願しそれを五日間実践しました。しかしこの行為は、法上人の教えに背く行為と気づき中止したといふにがい経験がありました。その自らの経験のなかで、改めて思われる上人は法然上人のみ教えでありました。

法然さまのおしえでは

「臨終の善惡は申さず」死に様の善し悪しなど関係ない。「そのままこいよ」と呼んで

くださらる如来様のお呼び声のなかで「信心決定（シンジン・ケツジョウ）」のひとは「疑いなれば正定聚（ショウジョウジュ）」「生きだら愚痴無知のひとがかえつて終わりもめでたくあるのです。どうぞくれぐれも学者ぶつた計らいをしないで、如来さまのお呼び声お念佛のなかで往生をとげようではありますか。

これにつけても親鸞は、「亡き法然上人のおことばを思い出すのです。  
淨土のひとは、愚者になりて往生す

かつて法然さまは、愚痴無知の人がお念佛を歎ぶ姿を見て、「往生必定すべし」お歎びなさつていたお姿をいまも思い出します。

反対に、学問沙汰をする物知りぶつた人をみて、「この人の往生はどうなるのだろう」と案じておられたそのお姿を、私は今も思ひだされます。

最後に親鸞は

世間のいろいろな人の小賢しい理論やことばに、騙されないで、どうか、ただ如来さまの私にかけられたご本願をたのむ信心、たじろがせたままで、お

のおのご往生なさいますよう。

敵も味方も、信心の人も、まだ信心の開けていない人へも、念佛を弾圧した朝廷や幕府の権力にたいしても、どうぞ仏教の教えに目覚めてくださいと、願わざにはおれない親鸞であります。

### 仏法ひろまれかし

世の中安穩なれとお念仏しあわせ（みんなでいっしょに）候うべし。

と願わざにはおれない親鸞がありました。

## 永代経

夏の初めにはお寺で《永代経》が勤まります。

勝林寺は七月八・九日です。  
永代経ってなんのための法要ですか。

まず、「永代」というのは「いつまでも」

も」「いくら世代がかわっても」ということ。  
次ぎに《經（きょう）》とは、たとえば「法華經」とか「涅槃經」「大日經」など、つまりお釈迦さまの説法の記録です。

さて、中国の古い時代からあるこの永代経は、詳しくは《永代祠堂經》といわれています。

「祠堂」というのは「納骨堂」「位牌堂」、つまりご祖先さまの遺骨や位牌をお祀りするお堂のことです。

世代がかわったり、また故郷から遠くへ移り住んだ場合、ご祖先様へのお供養も出来なくなってしまいます。そこで、応分の祠堂錢（お供養のお供え）を寺へ納めて、いつまでも寺に供養の読経を委託（おまかせ）するのです。それが永代経という法要と一般に考えられています。それが永代経という法要と一般に考えられてきました。

代理の供養、身代わり供養のための読経行事と言ふわけです。

しかし、眞面目に考えると、こんな馬鹿げた横着なことはありません。すくなくとも仏教真宗ではありません。

では、浄土真宗では永代経をどう考え、どのようにお勤めすべきなのでしょうか。

まず、「經（きょう）」とは、古代インド語ではストラといって縦糸と言う意味のことばかりで「ここを中心に据え、ここを依り所にします」といと説かれたほとけさまの説法」のことです。だから経というものは皆で唱えて「聞く」ものです。

### 七月 文月 のこよみ



「なにかをご縁にして、皆があつまって、いつもどこでも変わることのない如来さまのご説法を聞きましょう」。これが本当の仏教での永代経です。

いつでもどこでもどんな人でも、必ず救うと呼んでくださる如来さまの本願のおよびごえを、みんなで聞き、みんなで歎ばせていただきましょうと、そんな永代経に、今年も誘い合ってお参りしたいものです。

一日	朗読ボランティア（録音）
二日	豊岡病院検診
三日	おみがき奉仕
四日	出石組総代会総会 出石組弘壯總会（本覺寺）
五日	平田專福寺
六日	連研役員会
七日	勝林寺永代經
八日	勝林寺仏婦總會
九日	斎藤千恵さま三回忌法事
十日	直見專福寺法事
十一日	出石病院検診
十二日	山田葉留子さま三回忌法事
十三日	森戸たきゑさま三回忌法事
十四日	清水家十七回忌法事
十五日	勝林寺永代經
十六日	勝林寺仏婦總會
十七日	斎藤千恵さま三回忌法事
十八日	勝林寺永代經
十九日	勝林寺永代經
二十日	勝林寺永代經
二十一日	勝林寺永代經
二十二日	勝林寺永代經
二十三日	勝林寺永代經
二十四日	勝林寺永代經
二十五日	勝林寺永代經
二十六日	勝林寺永代經
二十七日	勝林寺永代經
二十八日	勝林寺永代經
二十九日	勝林寺永代經
三十日	勝林寺永代經

宮島 哲也さま一周忌法事  
兼井圭三氏宅法事  
みのりを聞く会  
あすなる（編集）  
山下祐治さま初盆  
湯口久義さま初盆  
銀杏会（→一日）

2010(平成22)年7月1日

〒668-0214 兵庫県豊岡市出石町内町59

# 納骨参拝研修旅行

五月末日、勝林寺では例年のように一泊二日で『納骨参拝研修旅行』を行いました。『本山参り』や『観光旅行』を絡めてではあります。中心はやはり大谷本廟への『納骨参拝』です。そしてこれは仏事の行事として復興したのは約三十五年まえからですが、実はこれは、「真宗の伝統行事」として江戸時代の往古より伝えられて来たものなのです。

死んだらどーへ?

古来日本では「土(累)にかかる」という觀念から土葬をして墓に葬りました。しかし、淨土真宗のご門徒たちは、お淨士で、先に亡くなつた方々と「俱(とも)に一つ處(ところ)に会える」(阿弥陀経には「俱会一處」といつてあります)といふことを信じていました。

また親鸞さまも「わたしが死んだらお淨土でまつてありますよ。またお出会いしましょう」とおっしゃっています。

私たちの先人は、だから皆、亡くなつた人の遺骨を京都の親鸞さまの廟堂に収めることを願つたのでした。そこへ納めれば、親鸞さまだけでなく亡くなつた父母とも懐かしい人ともお淨土で会えるからです。

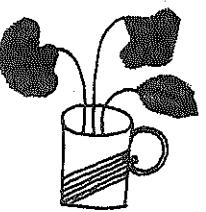
村々で講(説教)、「念仏講」、「本山講」などを組み、一年に一度その代表が大谷本廟へこの一年のあいだに亡くなつた方の遺骨を納骨したのです。その路銀は講の積み立て金から出しました。

その本廟納骨までの「仮り墓」だから、在所の墓はそんなに大きなものは不用であつたのです。

明治になつて戦争が繰りかえされると戦死者が天皇からいたいた偉勲・叙勲を誇るため、競争して大きな墓を作るようになつたのです。ごらんなさい、あなたの村の墓の様子を。

ついでながら、満州移民の人達の「慰靈祭」は、もういまでは消えてしまつています。この墓のことだけてなくみんなで深刻に考えてみなければなりません

## ことば

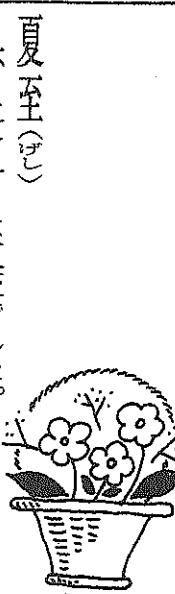


難しい漢字で漢語調だから、つい中国渡來の格言かとおもわれがちだが実は英語の格言

「逆境は人を賢くする」と直訳できる。

つらいことが襲いかかってきても、それを避けてはいけない。じつと我慢して耐えて行く、また勇気をだしてそれに立ち向かっていくなかで、あなたの人格は磨かれるのですよ「老い」とも「病」ともあるいは「死」ともそう対処して行きなさい。

「玉ニス」と言ったところにまた味わいがある。(我を主張する)角がとれて、黙つても人の心うつ深い光が感じられる、そういう人になりたいものです。「老い」の、ありたい姿です。



夏至は節句の一つ。屋が一番ながい。これからがいわゆる夏。朝4時には夜が明ける。でも今どきの若い人達は起きては来ません7時に時計の目覚ましが鳴らないと起きません。



## 田園のこやしは 人の足あと

花が咲いたと  
訪れるでないそ

昭和の初めごろ三代まえの爺さまは、目を

さますと毎朝、このことばをつぶやきながら田や烟の見回りにいっていた。篤農家とよばれていた爺さまであった。

「稻でも野菜でも、毎日見てやらにやーなに、はぐくんでやらにやー」

「万葉集のうたに、旅人の宿りせむ野に霜ふらば わが子はぐくめ天(あま)の鶴群(へたすむら)」

月に、週に、一回程度行つて、講話や傾聴。

これをビハーラー運動と称している先生がた。いかがでしょうか。

「雛を、親鳥が羽でつつんで育てるよう

齡をかさねて、そして枯れ果てて

最後死んでいくその日までを

かけし  
若い時代の手柄ばなし。それも結構。  
死ぬるまで  
大目に生き抜きましょうね

## 永代経ご案内

例年どおり

七月八日・九日

(7・8・9と覚えましょう)

九日 あさ9時半

「勝林寺仏教婦人会総会」  
(別に案内します)

八日 よる7時半 法要

ひる1時半 法要

永代経ご講師

富山県

広瀬

充弘

先生

◎七月三日午後2時「清掃おみがき奉仕」  
よろしくお願ひします。(仏事・仏婦)

ごらんなさい、あなたの村の墓の様子を。

どちらが豊かな暮らしなのか。馬鹿げたことかもしれないがつい考え込んでしまう。

昭和の始めごろのお年寄りは障子が明るくなると庭に出でてお天道さまにご挨拶して、それから馬草刈りに出掛けました。お天道さまのお恵みのなかで生活していた。自然の摂理のなかで。

今の人達は、時計の針の指示のなかで暮らしている。

ごらんなさい、あなたの村の墓の様子を。